

「保育の質」に関する意見

セレーノ 杉山千佳

1. 保育環境について、以下のような調査を行う必要があるのではないか
 - ・ 平成に入ってここ20年間ぐらいで、子育て・子育ての環境にどのような変化が起きたか？
 - * 「少子化」によってどう変化したか（子ども同士の自然な関わりができづらくなったのではないかとそれによって、子どもはどう変化したか）
 - * 「親の就労形態」の変化によって、どう変化したか（労働時間が長くなることで、親子のかかわりの時間が短くなっているのではないかとそれによって子どもはどう変化したか）
 - * 「地域環境」の変化によって、どう変化したか（親しいご近所や祖母がいないために、子どもが親以外の大人と関わる時間が短くなっているのではないかとそれによって子どもはどう変化したか）
 - ・ 少子化対策が本格化して、保育士の職場環境はどのように変化したか？
 - * 労働時間、雇用形態など
私の個人的な懸念は、公立保育所の保育士たち（特に団塊の世代）の長年培ってきた「保育の技」が、この民営化の流れの中でどこにも伝授されないまま、消えていってしまうのではないかとということ
2. 「保育の質」にはこれが必要、あれが必要と、どんどんとプラスしていくことには限界があるのではないかと
言葉で言うのはたやすいが、現場で子どもたちや親たちのためにそれができなければ、あまり意味がないと思う。大事なものは、「保育現場において、実際にやってみせられる」ことであり、人材育成も理論ばかりでなく、「体現できる」ように指導する方法に切り替えていくことが必要なのではないかと。
3. 子どもとどう関わるのかといったスキルは、相当磨いているように思うが、職場のマネジメントのような面も重要ではないかと。特に「ケアの職場」のマネジメントは、普通の企業の職場のマネジメントとはだいぶ違ってくると思われる。効率重視などといい加減なことは言うてはられない。保育士一人ひとりの特性と能力を最大限に発揮するためのマネジメントのあり方についても、検討していく必要があると思う。

4. 保育園、保育士だけでは限界がある。「地域のつながりのなかで子どもを育てる」ためには、保育園や保育士はどのような役割を果たせばよいのかについて、改めて検討する必要があるのではないか。親や地域のおじさん、おばさんの代わりに保育士が担うことはできないし、地域の自然の中で子どもたちが成長することも大いに期待できる。保育士にできないことは何かを整理し、そこをどのように補っていくか、その方法論も構築していく必要があるのではないか。

(参考)

「男性の目」「女性の目」

「男性の目」は対象を自分と切り離し、客観的に見る。それは全体よりも、ある部分を切り取り、その部分を明確に認識する。「女性の目」は、自他の未分化な状態のまま、主観の世界を尊重しつつ、ものを見る。それは明確さを犠牲にしても全体を把握しようとする。実のところ、われわれは現象を見る際に、この両方の目を必要とするのであろう。

(中略)

われわれが現象を始終「男性の目」で見て、そこに一般化を行うときは誤りが生じない。しかし「女性の目」で見たことを一般化しようとするときは、細心の注意が必要である。普遍から普遍に至る道はわかりやすい。しかし、個より普遍に至る道を探そうとするとき—それこそが新しい保育学には必要なのだが—、よほどの注意が必要なのである。

(中略)

このように考えてくると、今まで培われた「男性の目」を否定することなく、そこに「女性の目」もともに用いることによって、新しい保育学が築かれるのではないかと思う。そのためには、女性はその能力を十分に発揮して、新しい学の建設のために参加することが期待されるのである。(『子どもと学校』河合隼雄 岩波新書 より)

以上。